

教員養成課程における「小学校英語指導法」の 実践と考察

濱中 紀子 ・ 植田 和也 ・ ポール・バテン
(香川大学非常勤講師) (附属教職支援開発センター) (英語教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

A Practical Report on “Methods and Techniques of ELT at Primary School” for a Teacher Education Program

Michiko Hamanaka, Kazuya Ueta and Paul Batten

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 本稿では、小学校の英語教育に係る国の動向を整理したうえで、香川大学で本年度前期に実施した「小学校英語指導法」のカリキュラムとその実践を通して、これからの小学校における「外国語活動」の教科化に向けて、大学の教員養成課程でどのようなカリキュラムが必要となるのかを考察したい。特に、実際に受講した学生の声や評価から成果と改善のポイントを考察して、次年度のよりよい授業づくりに生かしたいと考える。

キーワード 小学校英語 授業全体の見直し 体験的授業 模擬授業 学校現場との連携

1 「小学校英語指導法」が必要である背景

(1) 社会の情勢や国の動向

社会の急速なグローバル化の進展により、子ども達が過ごす日常生活においても、様々な場面で外国語を用いてコミュニケーションを図る機会が増えると予想され、英語力向上の重要性が教育界だけでなく、経済界や政府等からも繰り返し主張されている。企業においても、社内公用語を英語とした会社もあり、経済界でも英語が使える人材が強くと求められている。

最近の国の動向としては、教育再生実行会議第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」(平成25年5月28日)において、大学におけるグローバル化への対応だけでなく、初

等中等教育段階からの充実として、小学校の英語学習の抜本的拡充(実施学年の早期化、指導時間増、教科化、専任教員配置等)や中学校における英語による英語授業の実施、初等中等教育を通じた系統的な英語教育の実施について求めている。さらに、初等中等教育を担う教員の質の向上のため、教員養成大学・学部について、次のようなことも指摘されている。

○量的整備から質的充実への転換を図る観点から、各大学の実態を踏まえつつ、学校現場での指導経験のある大学教員の採用増

○実践型のカリキュラムへの転換

○組織編制の抜本的な見直し・強化の推進

その後、平成25年12月には、文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計

画]が示され、それを受けて平成26年2月に「英語教育の在り方に関する有識者会議」が設置され、小・中・高等学校を通じた英語教育改革について9回の審議を重ねて、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」(平成26年9月26日)が報告された。この提言では、大学の教員養成におけるカリキュラムの開発・改善の必要性についても触れられ、例として、「小学校における英語指導に必要な基本的な英語音声学、英語指導法、ティーム・ティーチングを含む模擬授業、教材研究、小・中連携に対応した演習や事例研究等の充実」が示された。また、小学校英語に関することとしては、「改革1. 国が示す教育目標・内容の改善」において、主に下記3点についても指摘された。

- 小・中・高を通しての学びを円滑に接続
- 「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標（4技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む）を示す。
- 中学年から、コミュニケーション能力の素地を養うとともに、ことばへの関心を高め、高学年では基本的な表現によって「聞く」「話す」ことなどに加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。学習の系統性を持たせるため教科として行うこと。

さらに、引き続きの検討事項として、小学校の英語教育に係る授業時数や位置付け、適切な評価方法などがあげられた。

そして、中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会における「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（中間まとめ）」(平成27年7月16日)においても、「小学校中学年の外国語活動導入と高学年の英語の教科化に向け、小学校英語に関する科目を教職課程に位置付けるための検討を進めるべきである」としている。

そのような背景の中、小学校高学年においては、平成23年度から外国語活動が教育課程に位置付けられて5年を経た。また、小学校教員も多く参加している全国組織の「全国小学校英語

活動実践研究大会」は、平成27年度で第12回大会を迎えた。それ以外の研究会や演習会等でも、児童が英語を聞いたり話したりする機会が増え、「聞くこと」や「話すこと」において一定の成果が見られたことが報告されている。その成果と課題をもとに、今後、外国語活動の早期開始、高学年での教科化に向けて様々な検討がなされている。

新たな英語教育の在り方を実現するには、小学校においても、大学においてもそのための体制が整備されなければならない。現在、各県等において小学校英語教育推進リーダーの養成や研修を通じた小学校学級担任の英語指導力向上等の取り組みが推進されているが、教員養成課程の改善もまた、急務を要する課題である。

そして、現在、平成32年度を目途にした小学校での英語の教科化を視野に入れた教員免許法の改正が議論されている。小学校英語に係る枠組みや科目の位置付けは、まだ見直しのイメージの段階であるが、教員養成部会（第90回配付資料：平成27年10月15日）では、教科及び教科の指導法に関する科目として、イ 教科に関する専門的事項に「外国語」を追加すること、ロ 各教科の指導法に「外国語の指導法」を追加する方向で検討されている。少なくとも他の教科等と全て同じようにならなくとも、複数の授業科目において内容論、指導方法論等を盛り込んだ小学校英語に関する授業科目が小学校の免許取得において位置付けられようとしている。

(2) 各大学における取り組みや先行事例より

現在、小学校英語に関する学会としては、小学校英語教育学会があり、小学校における実践事例等も紹介されている。ただ、大学の教員養成での小学校英語に係るカリキュラム研究や具体的な実践事例の報告等は数少なく、例えば、内野(2015)では、「教員を志望する学生は大学で何を学べるか—小学校外国語活動の指導に関する講義の実態調査—」として、教員養成課程が設置されている全国の国公立大学及び東京都に所在する私立大学において、平成26年度に開講されている講義のカリキュラム及びシラバスの分析がみられる。また、山森(2013)では、

「外国語活動に求められる教師の教室英語力の枠組みと教員研修プログラムの開発」が報告されている。

また、大学としての小学校英語教育に関する様々な取り組みもみられる。鳴門教育大学では、平成17年4月に小学校英語教育センターを設置、宮城教育大学では平成23年2月に小学校英語教育研究センターを設置し体制整備に取り組んでいる。さらに、兵庫教育大学では、修士課程の学生を対象に小学校英語活動プログラムの実施をはじめた。北海道教育大学では、小学校英語教育指導者資格認定講座を平成26年度から開設するなどの動きもみられる。それ以外にも、県教委と連携して英語研修の実施や教職大学院に小学校英語に関する科目を設置する大学もみられる。

2 教員養成課程で学び身につけて欲しいこと

本学においては、平成22年度より選択科目として「小学校英語指導法」を新設科目として開設してきた。開講当初は、附属小学校教員の協力を得ながら交流人事教員が中心となり、授業内容を構成していた。筆者が関わるようになった平成26年度からは、小学校現場の現職教育の手法を取り入れながら、改善を図ってきた。英語教育に関する科目については、理論面や音声面、指導法、異文化理解等、様々な専門的分野から設定されている。小学校英語は、これまで学生が体験してきた教科・領域ではないだけに、必要な専門性と、より実践的な指導力を身に付けていくことが求められる。外国語活動では、児童が体験的に学習していくので、指導者となる学生も体験的な学びを通して、指導法を身に付けていくことが大切である。

(1) 学校現場の教員研修の経験から

筆者自身の経験として、これまで20年に渡り、小・中学校現場で英語教育に取り組んできた。その過程で、カリキュラムの開発や教材・教具の準備等、授業の諸条件を整えていくことにも労力を費やしてきたが、それ以上に重要で

あり、その在り方について考えさせられたのは、教員の指導力向上のための研修である。

どこの小学校でも、現職教育の年間計画を立て、教員が指導方法の研修を積んでいる。しかし、多くの教科、領域を指導している教員が研修すべきことはたくさんあり、忙しい日課の中に全てを位置付けることは難しい。

筆者は、直島小学校において文部科学省指定研究開発学校として研究に取り組んできた過程で、必要な教員研修を次のように4つの側面から捉え、研究計画を立てて実践してきた。

① 理論研修

英語教育に関する知識を身に付ける。英語教育のねらい、各学年の目標、言語活動の在り方など、指導の方向性を共通理解するための研修と捉えた。

② 指導法(PLAN立案)研修

児童の実態に合ったカリキュラムを作成する力をつける。前月末に、次月の単元計画を立て、教材・教具の準備をすることで、単元全体を概観し、児童につけるべき力を確認する。

③ 指導法研修

実際に指導する力を付ける。担任全員が、1年間に一回は授業研究を行うこととし、その授業前には、他の教員が児童役になって模擬授業を行うことで、その単元にあったねらいや言語活動にするにはどのように指導すればよいかを考える機会とした。

④ 英語力向上研修

英語を使って授業を進めることができるようにする。指導のためには、教員自身の英語力を向上させることが必要である。授業で使われる中心表現やクラスルームイングリッシュなど、教員の英語の発音を向上させる機会とした。また、全校集会などで、児童の前で発表するために、教員自身も英語劇や英語の歌などを練習し、英語を使って活動する楽しさを体験した。

学校現場での研修は、教員が実際に指導をしながらの研修になるため、ニーズが高い。しかし、一般的には、これだけの研修時間を学校現場に位置付けることは難しい。

つまり、前述の教員養成において求められ期

待される内容と学校現場で必要とされる研修内容の連携や融合を模索していくことが重要であると考えます。そこで、直島小学校での経験知から得た研修の基本的な考え方を教員養成課程の授業に生かし、実践的な指導力の育成につなげたいと考えます。

そのような趣旨を生かして、これまで、以下の観点からカリキュラムの改善を図ってきた。

まず、学ぶ児童の立場や指導する教員の立場になることで体験的に指導方法を学ぶ機会を増やしたことです。

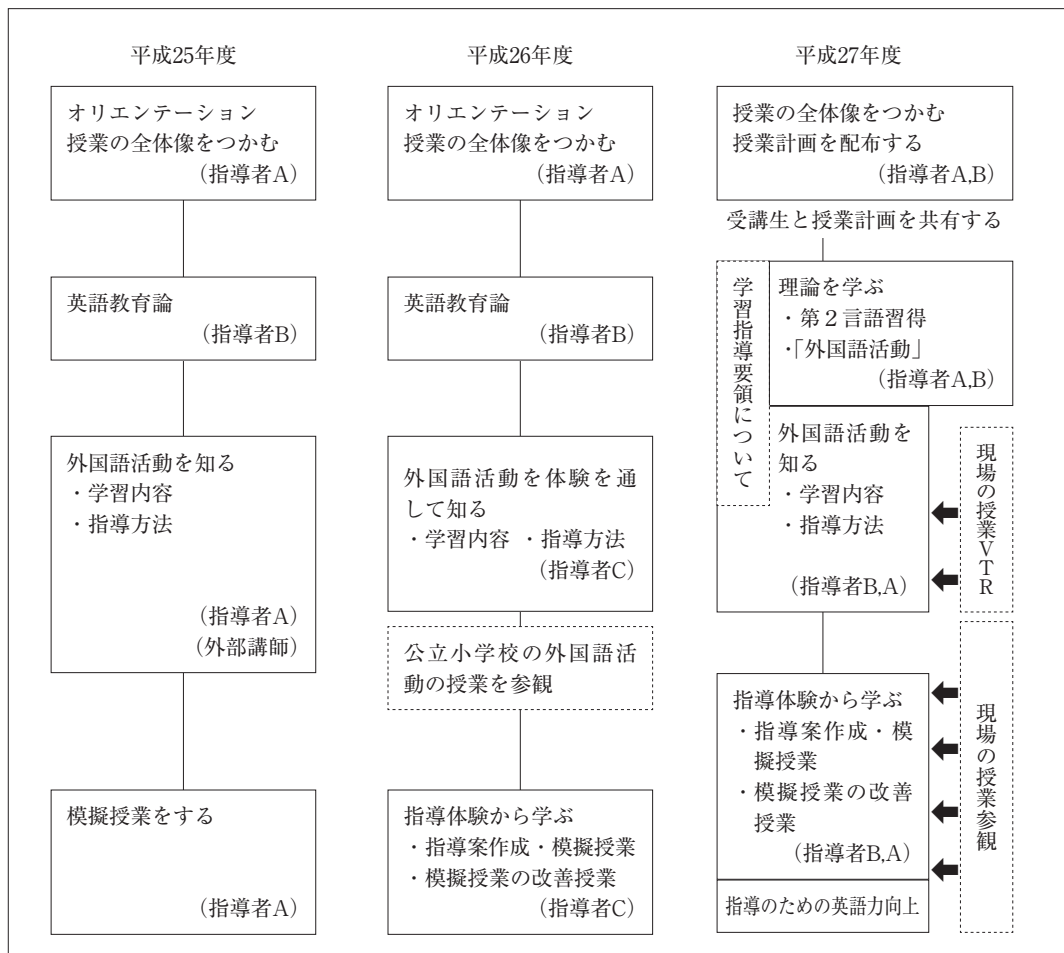
第二に、学校現場での実践から学ぶ機会を増やし、受講生の模擬授業に生かしてきた。平成27年度は4回設定し、そのうち2回選択できるようにした。

そして、指導者同士、指導者と受講生が、授業計画や評価計画を共有することで指導の効果を上げることを重視した。それ以外にも、環境整備やTTによる指導体制等も改善を図ってきたが、後述する。なお、平成25～27年度のカリキュラムの概要は図1に示す通りである。

3 平成27年度「小学校英語指導法」の概要

(1) クラスサイズ

平成27年度「小学校英語指導法」は香川大学教育学部及び教育学研究科の学生33名で構成されており、その内訳は小学校課程専攻が25名、中学校課程専攻が3名、そして特別支援教育専



【図1 カリキュラムの変容】



【図2 絵カード・音声教材】

攻の大学院生が5名であった。

(2) 指導体制

准教授Paul Battenと筆者が指導内容によってT1, T2となり指導した。また、香川大学教育学部学務係に勤務するアメリカ出身の職員が支援に入った。言語活動場面では、担任とALT(外国語指導助)役となり、チーム・ティーチングで指導した。

(3) 授業環境

学生が言語活動を体験的に学ぶために、電子黒板が設置された大教室を利用した。また、Hi, friends! 1, 2及び、Hi, friends! 関係の書籍や教材、小学校英語教育関係書籍など(図2)の資料を揃えた。さらに、学生に教材等を貸し出しするなど模擬授業構想の参考となるように配慮した。

(4) 学校現場との連携

大学内ではできない学校現場の授業参観の機会を4回設け、受講生が一人2回は参観できるようにした。その際に、可能な限り、授業後の討議にも参加する場を設け、学校現場での実際の学びを、自らの指導案作成や模擬授業の修正に生かせるようにした。

(5) 平成27年度の具体的な授業と評価計画

平成25~27年度の主なカリキュラムの変容に関して、概要を図1に、平成27年度の各回の授業計画を表1に示す。なお、各授業の評価として、まとめやワークシート、レポート以外に実技や実際の指導の様子を取り入れた。

4 具体的実践と学生の学び

(1) 理論を学ぶ

ねらい：母語以外の言葉を学ぶということの意味について考え、小学校で英語を学習することに対する考えをもつ。

① 「英語を学ぶ」ことを考える

○ 自分が英語を学んできた経験を話し合う。

受講生に自分達が子どもの時の英語との出会いについて考えてもらい、話し合った。よい先生、よい活動、よかったこと、よくなかったことなどについて話し合った。歌、ゲーム等が良かったという学生が多かった。

○ 小学生が英語を学ぶことのメリット、デメリットについて考える。

研究の立場から見た子供の第2言語教育、習得論、また、メリットとデメリットについて議論し、グループに分かれて、話し合った。

最初のテーマは「WHY?」だった。なぜ子供に第2言語の英語を教える必要あるのか。受講生からは、「音声面の柔軟さ」「好奇心や挑戦意欲」、「体験的な学びの適期」などの意見が出た。

2番目の授業のテーマは「HOW?」だった。ピアノや自転車をどのように練習したかを思い起こすなどして、子どもはどのように学ぶのが得意なのかについて話し合った。

○ 英語以外の言語でコミュニケーションを図る体験をする。

ほとんどの学生が知らないと思える言葉(スペイン語とフランス語)で、二つの教授法を使って初心者向けのミニレッスンを実施した。最初は、文法中心の授業で、先生がルールなどを日本語で説明した後、簡単な表現を使ってみた。学生からは、「表現の意味は理解できたが、すぐに発話することは難しい。」といった声が聞かれた。次に、対照的に、文法やルールの説明に一切触れず、絵と繰り返しなどを使って、スペイン語でスペイン語の簡単な表現を紹介した。その後、2つの教授法について議論した。説明している言葉が全部理解できなくても、「絵」によってだいたいの意味が理解できたこと、また、何度か繰り返しながらまねて言って

表1 平成27年度の授業計画

	授 業 内 容	評価方法
1	オリエンテーション 授業計画と評価計画を配布	
2	Why. Let's think about why we teach another language to young children.	コメント・まとめ
3	How. Let's think about how we can teach another language successfully to young children. What about you when you were a young child?	コメント・まとめ
4	Two styles of introducing new language. Let's compare these styles.	コメント・まとめ
5	小学校外国語活動指導理論 ・小学校における英語教育の経緯とねらい ・学習内容と指導方法（現状と課題）	ワークシート
6	言語活動（音声に慣れ親しむ活動）の体験・指導法 ・歌やチャンツの活用方法 ・ゲーム的な活動の活用方法	実技・ワークシート
7	言語活動（コミュニケーション活動）の体験・指導法 ・Activity（インタビュー、クイズ、発表など）の指導方法	実技・ワークシート
8	言語活動（音声と文字をつなぐ活動）の体験・指導法 ・アルファベットを使った活動と指導方法 英語教育における小中連携	実技・ワークシート
学外学習 ①/②	授業参観と討議 11:00～ 14:00～ 香川大学教育学部附属高松小学校 1年「はじめまして」 直島町立直島小学校 2年「ぜんぶでいくつ」	レポート
9	単元・授業の組み立て方 模擬授業指導案作成	活動の様子
10	模擬授業①	指導案・指導の様子
11	模擬授業②	指導案・指導の様子
学外学習 ③	授業参観と討議 14:00～16:30 直島町立直島小学校 4年「音の足し算」	レポート
12	模擬授業・授業参観をもとに考察 指導案修正	レポート
13	修正した指導案による模擬授業 指導者のクラスルームイングリッシュ	実技
学外学習 ④	授業参観と討議会 14:00～16:30 直島町立直島小学校 5年「行ってみたい国」	レポート

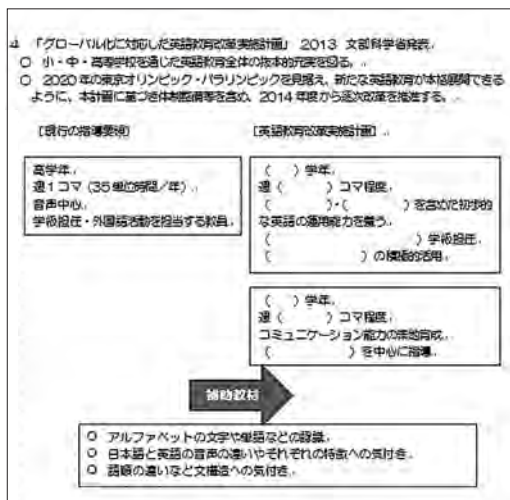
いるうちに発音し易くなっていくことを体験を通して学ぶことができた。

ここまでの授業は、ニュージーランド出身の指導者が全て英語で進めた。最初は少し戸惑っている学生も見られたが、指導者と英語でやりとりをしたり、自己紹介や授業の感想を英語で書いたりして、英語を使うことへの抵抗感を少しずつ減らしていった。児童が外国語として英語を学ぶ際の楽しさや難しさを体感させることができた。

② 小学校における英語教育について知る

ここでは、現在の公立小学校で実施されている外国語活動の内容や現行の学習指導要領と改訂の方向性等を扱った。

授業で取り上げた主な内容は、「平成23年度に外国語活動が開始されるまでの経緯」、「学習指導要領における外国語活動の位置付け」、「外国語活動の現状と課題」、「学習指導要領改訂に向けた英語教育の動向」である。実際に学生に配布した資料の一部抜粋を示す（図3）。



【図3 授業で使用したワークシートの一部】

(2) 児童の立場から授業を体験する

ねらい：児童の立場になりいろいろな言語活動を体験することを通して、小学校における英語を使った言語活動の在り方や工夫点について考える。

① 音声に慣れ親しむ活動

○歌・チャンツの効果と活用例

Hi, friends! に掲載されている歌やチャンツを体験し、リズムによって発話することの効果や学ぶとともに、それらを使った言語活動のさせ方を学んだ。

○英語に慣れ親しむゲーム的な活動

楽しみながら何度も英語表現に触れる活動として、ゲームなどの活用方法を学んだ。

「キーワードゲーム」や「ポインティングゲーム」(図4)を体験し、競争するだけでなく、協力や達成感が感じられる言語活動にするための多様なゲームルールを考えた。



【図4 ポインティングゲーム】

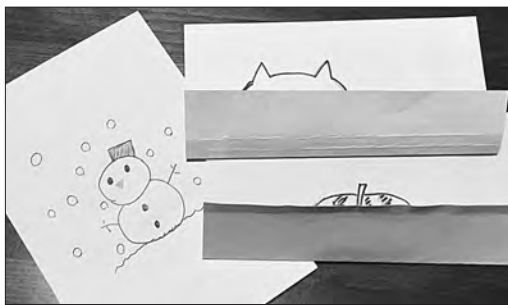
② 英語を使ったコミュニケーション活動

「児童だけで英語を使ってラッキーゲームをする」という活動を、カードを使い(図5)、児童役と指導者役になって体験した。「ゲームのための準備や片付け」も言語活動の一部と考えて、指導者が簡単な英語表現を使って指示する方法を学んだ。



【図5 色・形のカード】

また、児童自身が画いた絵の一部を見せて何かを尋ね合う活動では、既成の絵ではなく、自分が画いた絵(図6)を用いることで、活動への意欲が高まることも体験した。



【図6 学生が作ったクイズ】

○自己表現することをめざす活動

単元の最後に「おすすめの国」を紹介する単元では、公立小学校での実際の授業を映像で見て、児童が自分の思いを表現するためにどのように授業を組み立てていけばよいかを考えた。児童の発達段階に合うねらいの設定や支援の程度などについて考察した。

③ 今後を見据えた文字指導

現行の学習指導要領で文字をどのように扱っているのか、また、学習指導要領改訂に

向けて文部科学省ホームページに示された補助教材等から、文字に関する教育改革の方向性を学んだ(図7)。

小学校の新たな外国語教育における補助教材

身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」ことに加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養うことができるよう、映像や音声を活用し、

- ・ アルファベット文字の認識、
- ・ 日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気づき、
- ・ 語順の違いなど文構造への気づき等

に関する指導に必要な新たな教材

【図7 プレゼンテーションの一部】

また、アルファベットの知識や音韻認識力を育成する実践事例として、直島小学校における先行実践の授業映像を用いた。児童が楽しそうに身近な単語を集めて、書いたり読んだりしている様子から文字に慣れ親しむ姿を見ることができた(図8)。



【図8 6年生の授業の様子】

授業を通して、学生が児童の立場になり言語活動を楽しむ姿が見られた。その過程で小学校における言語活動を理解することができたと思われる。特に、コツをつかむこと、実感を伴うことにつながった活動は今後のカリキュラムにも生かしていきたい。

「とっても楽しかった。正しい発音やリズム、子どもと楽しくゲームをするコツなどが学べて大変参考になった。教員になった時、やりたいと思うことばかりであった。」

「いろいろな教授法や実践例を教えていただけて、ゲームも実際にやってみて、実感を伴った理解ができた。」 (学生の感想より)

また、活動の有用性についてグループ間で活発に意見交換をしていた。言語活動を実際に体験することで、その言語活動の目的や児童への配慮事項などに気付くことができたと考ええる。

「活動をして学ぶ場面が多かったため、分かりやすく勉強になった。小学校段階の英語では体を使ったり基本的な表現を発音したりが大切になってくることが分かりました。」

(学生の感想より)

さらに、ALT役として、今年度から初めて参加した大学教員からは、授業を振り返り以下のような感想があった。

「指導案、小学校の英語の授業の言葉の選択、活動、評価について細かく学生に教えた。実際にHi, friends!を使用し、電子黒板も使って学生に教えた。米国出身とニュージーランド出身の2人の大学教職員がALT的な役になり、サポートすることで、『日本人にとって発音の難しいところ』と『外国人から見た日本、小学校、教育制度』など、関連する話題についても活発に話す授業になった。また、ALTとの話し合いに使う表現(クラスルームイングリッシュ)や分からないときに使う表現などもいっしょに練習した。現場に立った時にこのような練習は役に立つ。」

(大学教員の感想)

(3) Hi, friends! の内容を知る

ねらい：Hi, friends!の内容から、学習指導要領がどのように具現化されているのかを知る。

まず、学校現場における外国語活動の授業の様子を映像で見ることを通して「コミュニケーション能力の素地を育成する」とは、子ども達のどのような姿をイメージするのかを話し合った。学生からは、「子ども達を楽しそうな笑顔で活動している」、「相手の話を一生懸命聞いている」、「英語を使おうとしている」、「進んで話しかけている」というような言葉が聞かれた。

次に、学習指導要領にある「・・・児童の発達段階を考慮した表現を用い、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を・・・」を具現化したものとして、Hi, friends! がどのような題材を扱っているのかを班ごとにいくつかの単元を担当して調べた(図9)。

Hi, friends! / 1			Hi, friends! / 2		
Lesson	タイトル	題材	Lesson	タイトル	題材
L1	Hello!	あいさつ名刺	L1	Do you have a?	アルファベットの小さな数 (100?)
L2	I'm happy.	シスターへの挨拶	L2	When is your birthday?	誕生日 (日付)
L3	How many?	数 (りんご)	L3	I can swim	できること
L4	I like apples	好きな食べ物	L4	Turn right.	たすねのパス
L5	What do you like?	色 (着る洋服)	L5	Let's go to Italy!	いる人 (国)
L6	What do you want?	アルファベットの文字数	L6	What time do you get up?	時刻と起床の時間
L7	What's this?	教室にあるもの (文房具)	L7	We are good friends!	日本語
L8	I study Japanese	教科書、曜日	L8	What do you want to be?	将来の夢
L9	What would you like?	食べ物 (デザート)			

【図9 学生がまとめたHi, friends! の内容】

そして、それらの題材を、どのような言語活動で、どのように単元を構成し、どのように評価しようとしているか、ワークシートを使ってまとめた。また、使用される教材や教具、電子教材にも実際に触れてみた。

また、全てのチャンツをまとめたプリントを使い、ペアで読み合うことで、Hi, friends! で扱っている基本的な英語表現を理解した。

以上のように、教材を体験的に学んだことで、外国語活動の具体的なイメージをもつことができたとする感想が多く聞かれた。

(4) 小学校現場で授業を参観する

ねらい：小学校現場でどのように外国語活動を指導しているのかを参観することで、その指導方法を学ぶ。

① 附属高松小学校第1学年 27名参加

日時 H27. 6. 25 (木) 11:05～11:25

単元 「How are you?」

How are you? を使っている場面を見せて理解させ、歌や口慣らしで親しんだ後に、友達と尋ね合う。難しいと感じる児童の気持ちに寄り添って指導する姿を学ぶことができた。

「ただ単に○○の英語を覚えるというのではなく、子どもが外国の方との会話で必要としている言葉に重点を置いて指導案を立てているのが印象的だった。」

「音楽やマスコット、ジェスチャーなどを活用して楽しく授業ができる環境を作っていた。」

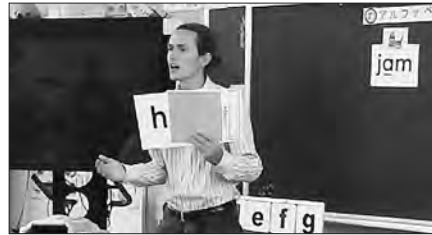
(学生のレポートより)

② 直島町立直島小学校第4学年 8名参加

日時 H27. 6. 25 (木) 14:00～14:45

単元 「音の足し算」

今後の教科化に向けて、小学校段階で文字をどのように、どの程度扱うのが課題となる。アルファベットに音があることを知り、その音を足して簡単な単語を読んでみる授業である。児童は、アルファベットフォニックスチャンツなどでアルファベットがもつ音に親しんできたので、アルファベット3文字程度の単語はほとんど読むことができた。音声と文字をつなぐ言語活動を考えるよい参観授業である (図10)。



【図10 クイズを出すALT】

「子どもの活動の時間が多く、主体的な活動だった。書いてみたり、視覚的に分かたり、音楽で楽しんだり、子どもにとってとても楽しく、学びの多い活動だと感じた。」

(学生のレポートより)

③ 直島町立直島小学校第5学年 5名参加

日時 H27. 9. 17 (木) 14:00～14:45

単元 「行ってみたい国」

直島放送局が「行ってみたい国」について街頭インタビューをするという設定で、やりとりをする言語活動である。単元の最後の時間になるため、児童同士のやりとりの後、参観者へのインタビューをする (図11)。児童は参観者の応答に相づちを打ったり、相手の答えに反応したりしながら会話をする。より実践的な場面での児童の姿を見ることができ参観授業である。



【図11 参観者にインタビューする子ども達】

「子ども達が笑顔ではきはきとインタビューしてくれた。相づちを打って聞いていたのも、とても感じがよかった。」
 「インタビューのやりとりが5回くらいは続いてすごいと思った。」 (学生のレポートより)

(5) 指導案を作成する

ねらい：外国語活動の指導案を作成する力を付ける。

指導案を立ててみるだけではなく、実際に自分が模擬授業をすること、また、その指導案を振り返り、改善する機会までつながることが大切であると考えます。そこで、次のような手順で指導案作成に取りかかった。

① 模擬授業例から全体像を把握する。

単元計画例、模擬授業担当例(図12)を参考にして、どのように模擬授業をするかを理解する。

時間	ねらい	主な言語活動
1時	動作を英語で「できる」「できない」という表現を使い、英語にはそれぞれに違いがあることに気付く。	導入、できること、できないこと、ボイティングゲーム、ジェスチャーゲーム、Let's listen.
2時	動作を英語で「できる」「できない」という表現に慣れさせ、できるかどうかが分かるたり聞いたりする表現を練習する。	ボイティングゲーム、Let's chant、ロケイス。
3時	できるかどうかを尋ねたり聞いたりする表現に慣れさせる。	Let's chant、ペアでインタビュー、Who am I? ロケイス。
4時	自分ができるところを伝え、友達と積極的に交流しようとする。	Let's chant、友達にインタビュー、グループなどで自分ができるところを発表し合う。

【図12 Hi, friends! 2 Lesson 3】

- ② 4人組を8班作り、各班でHi, friends! から1つの単元を選び、各自が担当する言語活動を決める。
- ③ 資料を活用して教材研究をする。教材研究の資料として、Hi, friends! 電子教材、各教

1 単元「Turn right」 1/4

2 目標
 様々な建物・道案内の英語での言い方を知ると共に日本語との違いに気がつく。

3 学習指導要領

児童の活動	指導者の活動	指導上の留意点
1. 元貝にあてはまる。児童と一緒にあてはまる。		1. 英語の音をよく聞き、
2. 本時の活動を通してALT(傍)と一緒に行う。		2. 英語の音をよく聞き、
(1) 色々なpracticesを行う。		3. 英語の音をよく聞き、
建物の言い方と道案内の言い方を知ろう		
(2) What is this building? 英語で聞いてみる。	絵がどの部分を指しているか全体を見えさせる。	宿題をわけて、499にはわかるように指導する。
If you know the answer, write your hand.	これはALTとペアでインタビューして確認させる。	建物の名前や場所も日本語でわかるように指導する。
(3) お話しをします。	「What is this building?」と日本語で聞いてみる。	お話しゲームは14ページの1/4

【図13 学生の指導案例】

科書会社の児童用テキスト教材、音声教材、Hi, friends! 準拠Picture cards等を活用した。

- ④ 自分が模擬授業をする言語活動を含む1時間の指導案を作成する(図13)。
- (6) 模擬授業をする

ねらい：作成した指導案の一部を使った模擬授業を通して指導の在り方を学ぶ。

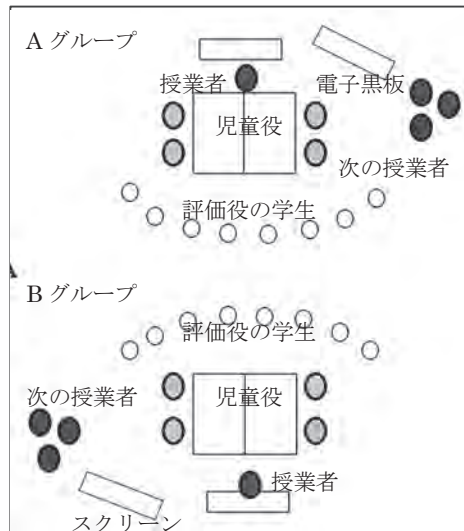
全員が模擬授業体験をするためには、時間や場所、役割等を明確にし、学生がそのための準備ができることが大切である。

8班を、4班ずつAグループ、Bグループとし、次のように役割分担した(表2)。

【表2 授業分担】

A・B	1班	2班	3班	4班
5/14	授業者	児童役	評価者	
	児童役	授業者		
5/22	評価者		授業者	児童役
			児童役	授業者

また、模擬授業の場所を示し、電子教材等も配置した(図14)。



- 前半に授業をするグループ
- 後半に授業をするグループ
- 参観者として授業評価をする役

【図14 模擬授業の場所】

一人一人の模擬授業に対して、よい所は水色のカードに、改善する点は黄色のカードに書いて、授業者の振り返りカードに貼る（図15）。



【図15 学生の振り返り表】

模擬授業に向けて、学生はそれぞれに準備をした。ピクチャーカードで練習する、電子教材を使う練習をする、自作の教材を作る、ゲーム的な活動のための用具をそろえるなど、意欲的に準備に取り組んでいた。

【模擬授業例1】

【Hi, friends! 1 Lesson 2 What do you like?】

色や形の言い方を絵カードを見せながら導入する場面である（図16）。全て英語で、ゆっくりと分かりやすく発音したり、繰り返しまねて言わせたりして、音声を何度も聞かせていた。

やや単調になり、「形」の導入では動作化などの改善が必要という声も聞かれた。



【図16 色と形を導入する】

【模擬授業例2】

【Hi, friends! 1 Lesson 7 What's this?】

シルエットクイズで中身を当てる活動を指導した（図17）。自作ボックスと携帯の光源でシルエットを見せ、当てる意欲を高めた。

What's this? It's ... の中心表現だけになるので、どのように英語表現を広げるかが課題である。



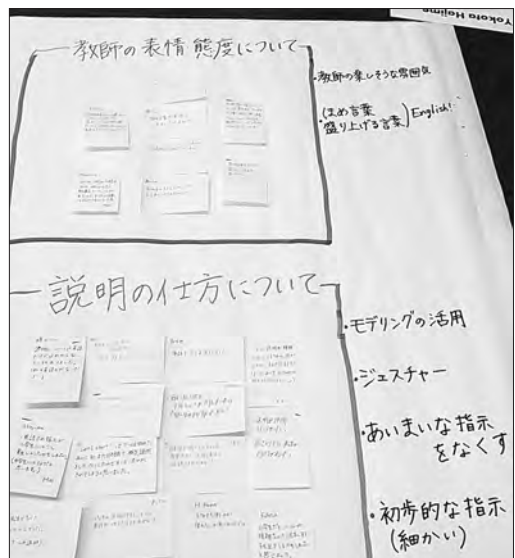
【図17 答えを見せる】

短時間の模擬授業ではあったが、全員がよく準備や練習をして臨むことができた。ALT役もいて、よく打ち合わせをしてティーム・ティーチングを試みていた。全ての授業をビデオ撮りしたので、後で改善点を提示するよい資料となった。

（7）模擬授業を考察し改善授業をする

ねらい：模擬授業を振り返り、指導案を改善することができる。

まず、それぞれの班で、模擬授業後のコメントカードを仲間分けし（図18）、授業改善の視点をつかみ、改善方法について話し合った。



【図18 仲間分けしたコメントカード】

その後、自分の指導案における模擬授業部分について、どのように改善するかを考えた。その際、小学校現場で参観した授業と比べることで、改善の手掛かりとした。改善する点として、「言葉だけでなくジェスチャーなどをつけて分かりやすくする」、「活動の説明が長いので、指示を短く切って、英語の指示で動かしながら活動の場を作る」、「日本語が多いので、もっとクラスルームイングリッシュを使う」などが挙げられた。

その中で、8名が改善案をもとに、次の時間、改善した部分の模擬授業を行った。

【改善授業例】

【Hi, friends! 1 Lesson 7 What's this?】

シルエットクイズの改善案として、「中心表現だけでなく、答えに関連させて英語を使う」とし、中身を当てた後、Cute? Do you like bears? など、児童とのやりとりを試みた。クマが好きという学生が多く、Cute! Strong! などの理由も聞こえてきて、自然な会話が続き、みんなに笑顔が見られた。

(8) 学生自身の英語力向上を図る

ねらい：外国語活動でよく使われる語彙や表現を使えるようにする。

小学校外国語活動でよく使われる英語を正しい発音で示すことができるかどうかを確認し合うことが、自信を持って英語を使うことにつながる。英語を母語とする指導者2名と一っしょに3つのコーナーを作り、学生が回って合格印をもらう活動とした。

【チェック1】

絵を見て単語を正しく発音できるか確認する。

【チェック2】

ペアで、プリントにある基本的な会話文を言い、発音や抑揚などを確認する。

-例-

- 1 A : Do you like milk?
B : Yes, I do. I like milk.
- 2 A : What color do you like?
B : I like red.

【チェック3】

ジェスチャーをつけてクラスルームイングリッシュを使えるかどうかを確認する。

-例-

- 1 ほめる
・表情 ・いろいろなほめ言葉
- 2 「～をしましょう」と活動を促す
・歌を歌う
・チャンツをする
・インタビューする

学生は楽しそうに、大きな声で発音していた。ネイティブの発音を聞いたり、チェックシートで合否をもらったりすることが、学生の活動意欲を高めていた。

5 学生の評価からの考察

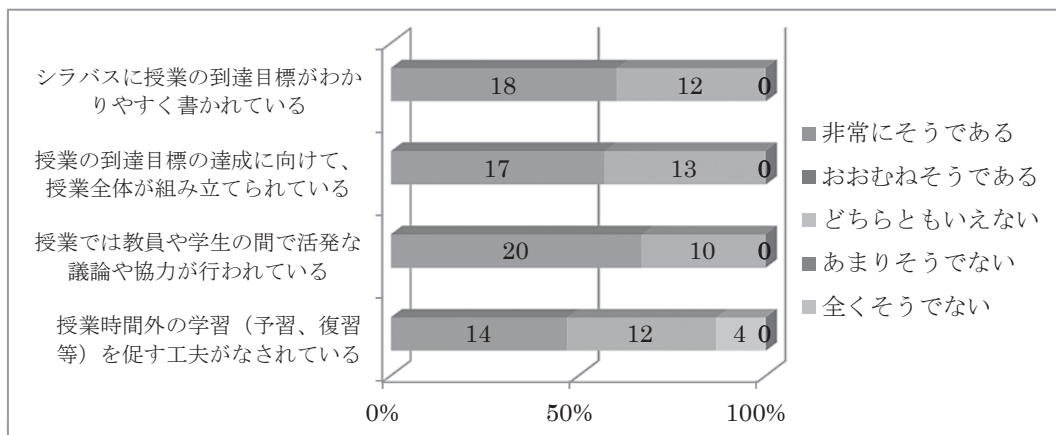
(1) 授業の組み立てについて

図19に示すように、授業の到達目標、組み立てについて、全員が肯定的であった。特に、平成27年度のカリキュラムにおける改善点として取り組んだ授業の全体計画を学生と共有したことで、学生が、何をどのように学んでいるのかという意識をもつことができたと考える。「学生が活動をして、その活動を振り返り、またやってみて・・・としっかり定着するような授業をしてくださり・・・」という学生の記述からも、少しずつ到達目標に向かっていることを体感させることができたと言える。また、活動の振り返りが、学生同士の考えを交流する場にもなった。

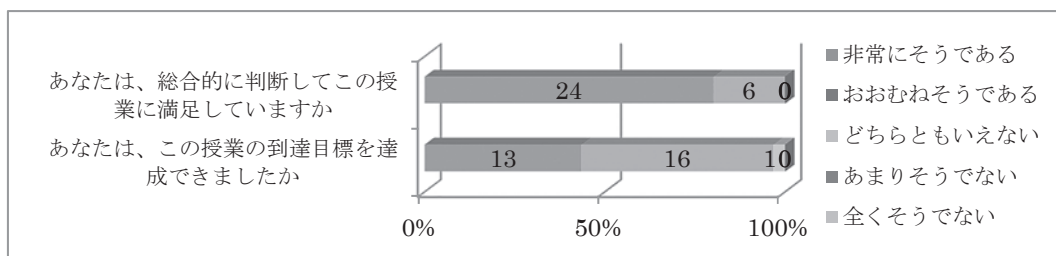
一方、理論面においては、小テストなどを用いて前時の授業内容をまとめるなど、自発的な家庭学習を促す工夫も必要だったと言える。

(2) 学生の授業への取り組みについて

図20の通り、学生の授業に対する満足度はかなり高かったと言える。学生の授業評価における自由記述からは、英語に対する意識の変容や自らの不安の軽減等が多く見られた。例えば、「英語は苦手だったけど楽しかった。英語に対する意識が変わったように思う。難しいと思ったりごみしていたが、英語は楽しいとい



【図19 学生による授業全体の評価 実施日：平成27年7月13日 対象：30名／33名】



【図20 学生の授業への満足度 実施日：平成27年7月13日 対象：30名／33名】

うことを子ども達に伝える自信がついた。」や「「外国語活動」に対する理解やイメージが広がり、不安が少し減り、楽しいな思いが増えた。」「外国語の授業に対して何も対策をしていなかったのが不安でいっぱいであった。講義を受けて、イメージが湧いてきた。外国語の授業をするのが楽しみだ。」といった楽しみと捉えられるようになったことが複数名の学生に見られた。

現在の学生自身の小学校英語に対する知識や指導技術はまだ不十分だとしても、記述から分かるように、学生本人の英語に対する肯定的な気持ちが生まれたことが、満足度につながったと言える。また、多くの学生の記述に見られた「楽しかった」という思いは、児童と指導者の両方の立場から体験的に学んだことがよかったと考える。外国語活動についての具体的なイメージを持つことが、指導への自信につながるということがよく分かり、今後のカリキュラムの内容でもより充実を図りたい。

（3）現場の授業参観について

学校現場の授業を複数回参観したことは学生にとって、イメージの形成や模擬授業の構想にも大変役立った。授業後、全員がA4のレポート用紙を埋め尽くす程に学んだことを記載していたことから、いかに有益だったかが分かる。また、小学校での授業参観に引率した指導者からも次のような意見があり、その効果を感じる。

「3回に分けて学生を引率して現場に行き、小学校の英語のレッスンを参観した。授業でも、指導案の一部をそれぞれの学生が選び、実際に模擬授業をした。それをビデオで撮影し、レポートでも反省して、評価した。学生による授業評価もとても良かった。とても実践的な授業で、これからの小学校の英語の先生の養成に大きく役に立ったと思う。」（ALT役の大学教員より）

今後のカリキュラムにおいても小学校での授業参観は欠かせない内容であると考ええる。

(4) 指導教員に対して

授業評価において、学生の指導教員に対する記述には、よかったと評価した言葉が多く見られた。具体的に見られた記述として、「教材や教具で身をもって学べた。丁寧なプリントで、今も大事にしている。きめ細かく準備をしてくれた。実際の活動が多く楽しく学べた。ネイティブの先生の英語に多くふれた。先生のフォローに助けられた。授業の雰囲気よかった。」等、指導教員から「指導の姿勢」を学んでいることが分かり、改めて授業への責任感を考えさせられた。これらは、今回の授業では取り上げなかったものの、授業マネジメントとして大変重要なポイントであり、今後授業内容として取り上げていきたい内容である。

6 成果と課題

(1) 成果

まず、体験的、実践的な学習スタイルを意図的に取り入れてきたことや授業の全体構成が学生の実態やニーズを重視していたため、学生が英語学習の楽しさを感じることができ、授業への高い満足度につながったことがあげられる。次に、現場の授業参観を複数回、選択できる形態で取り入れたことが、学生の模擬授業やその改善授業のために大いに役立ったと考える。さらに、大学教員同士の柔軟なチーム・ティーチングの指導により、学生が英語に多く触れ、言語を通じた文化の違いに触れる機会をもつことにつながった。

(2) 課題

小学校英語に関する科目が本授業のみであり、15回の授業に理論から実践まで全ての内容を取り込んでいるため、それぞれの内容に十分な時数が当てられなかった。例えば、指導案作成やその教材準備のための時間をより設定する必要があったと考える。また、学習内容を充実させるためには、内容事の講座開設等も考えられる。さらに、今後の教科化や免許法改正を考慮しながら実践的な学習スタイルを維持するためには、適切なクラスサイズが前提となる。例

えば、平成26年度は15名、平成27年度は33名の受講生であった。この程度の人数なら、体験的な学習や一人一人の模擬授業も可能であるが、これ以上の40名を超える状況では困難である。より実践的な授業を展開するためには、それが可能になるクラスサイズや指導体制も考慮しなければならない。

最後に、本稿では「小学校英語指導法」の実践をもとに検討してきたが、各大学での取組が論文等で報告や公表されていないため、学生の授業に対する経年評価や他大学のカリキュラムとの比較検討などを積み上げながら、一層の充実改善を図っていくこととする。

引用文献・参考文献

- 内野俊介 (2015) 「教員を志望する学生は大学で何を学べるか—小学校外国語活動の指導に関する講義の実態調査—」 JES Journal 2015 Vol.15 pp.83-94
- 英語教育の在り方に関する有識者会議 (2015) 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告〜グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言〜」 (H26.9.26)
- 教育再生実行会議 (2013) 第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」
- 直島町立直島小学校 (2013) 文部科学省指定研究開発学校実施報告書
- 直島町立直島小学校 (2014) English Teaching Plan
- 直島町立直島小学校 (2014) English Review Sheet
- 文部科学省 (2015) 中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会における「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について (教員養成部会 中間まとめ)」 (H27.7.16)
- 文部科学省 (2015) 中央教育審議会 教員養成部会 第90回配付資料 資料3 教職課程単位表 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryu/_icsFiles/afiedfile/2015/10/28/1363052_03.pdf
- 山森直人 (2013) 「外国語活動に求められる教師の教室英語力の枠組みと教員研修プログラムの開発—理論と現状をふまえて—」 JES Journal 2013 Vol.13 pp.195-210